

## 15

## 戦後占領期における性感染症

## —GHQ/SCAP 文書にみる梅毒の流行—

田中 誠二<sup>1)</sup>, 杉田 聡<sup>2)</sup>, 安藤 敬子<sup>3)</sup>, 丸井 英二<sup>1)</sup><sup>1)</sup>順天堂大学医学部公衆衛生学教室, <sup>2)</sup>大分大学医学部看護学科, <sup>3)</sup>国際医療福祉大学福岡看護学部

**【背景】** われわれは、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている GHQ/SCAP 文書のうち Weekly Bulletin に付録として記載された感染症統計を復刻・整理し、戦後占領期における感染症流行の実態解明を目指している（その成果の一部を「占領期における急性感染症の発生推移」日本医史学雑誌 2007; 53(2): 229-248 にまとめた）。本報告では、新たな課題として着手している性病統計の復刻・分析作業から現時点で得られた結果をまとめる（なお、今日では「性感染症」という呼称を用いるが、本研究で扱う資料の記載が“VENEREAL DISEASE”となっていること、1948（昭23）年に「性病予防法」が制定された背景などを踏まえ、本報告では「性病」と呼ぶこととする）。

**【本報告の目的】** 本報告では、1) GHQ/SCAP/PHW（連合国最高司令官総司令部公衆衛生福祉部）が収集した性病統計の概要を明らかにすること、2) 性病統計のうち梅毒（SYPHILIS）の発生推移を明らかにすることを目的とする。

**【方法と材料】** GHQ/SCAP 文書のうち Weekly Bulletin に付録として記載された性病の患者数記録（都道府県別・月別／週別）を電子ファイル化した。なお、1946年1月から3月については、PHW内の人口統計課（Health Statistics Branch）史料に独立して存在した記録を同様に電子ファイル化した。分析にあたっては「月別」の罹患率をグラフ化した。「月別」の記録が確認できない場合は、「週別」記録を月毎にまとめた後、当時の都道府県別人口を用いて罹患率を算出した。

**【結果と考察】**

1) 現在、所在が確認できる GHQ/SCAP/PHW の性病統計は、1946（昭21）年1月第1週から1951（昭26）年3月第5週までの週別記録、全270週分である（4週分の欠落あり）。また、1948（昭23）年1月以降は月末にその月をまとめた月別患者数・罹患率の記録が添付されており、全37月分を確認することができる（2月分の欠落あり）。記録された疾患は、はじめ「SYPHILIS」（梅毒）、「GONORRHEA」（淋病）、「CHANCROID」（軟性下疳）の3種であったが、1949（昭24）年10月第1週から「LYMPHOGRANULOMA」（鼠径リンパ肉芽腫）が追加され全4種となった。

2) 全国における梅毒の罹患率推移をグラフ化すると、1946（昭21）年から時間の経過とともに上昇し、1948（昭23）年4月をピークにその後減少する単峰性の線を描いた。これを地方別に見ると1946（昭21）年前半と1950（昭25）年以後は九州地方で罹患率が比較的高いが、その他の期間では近畿地方で罹患率が高い。前述の通り1948（昭23）年の春に全国の罹患率は最も高くなるが、これを都道府県別に見るとすべての県でこの時期に罹患率の上昇があるわけではなく、秋田県、千葉県、愛知県、兵庫県においてのみ際立った上昇が確認できる。その後、いずれの県も罹患率は急激に減少しもの水準に戻ることから、これを実数の“純粋な”増加と解釈するには慎重な検討を要する。その背後にあった出来事と照合し（例えば、この時期に占領軍の司令による患者報告システムの強化などがなかったか）、占領期における性病対策の実態をより鮮明に描き出すことが今後の課題である。

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「占領期の保健医療政策に関する考察—GHQ文書の電子ファイル化による時系列分析」(研究代表者:杉田聡)および萌芽研究「GHQ文書を用いて戦後5年間の感染症流行を解明する研究」(研究代表者:丸井英二)の成果の一部である。